

藤 生徒の考へる點、諸先生方の各自の御考へ方も異なる點も

或るので生徒のみ一概に言へない點もあるかも知れませ
ん。

校長 生徒の悪いところは、生徒課からも注意させるし、第一生
徒自身の自肅に待ちたい。

○生徒學校以外で師事すること

山本 生徒は學校の先生に學ぶ事は本分であたりまいで他の先生
につくことは望ましくない。

中山悌 それは先生の技能に自信を持たれる方は別として、例へば
自分の様に未だに會得してゐない點、生徒が外のいゝ先生
について學び度いといふ時には、それに是非さうしろと勸
める積りだ。

校長 私はそれがほんとの態度だと思ふ。

長坂 教へる方も習ふ方も二人の先生につく事は悪い様に思ふ。

他の先生についても若し技術の點悪い先生に知らずについ
たなら此の生徒は不幸だと思ふ。

諸教官 それは重大なる問題なれば大に検討すべきである。

校長 是は次會の宿題としておきますから、よくお考へ下さい。

(手書き) (昭和二十一年度 議事録 教務課)

(六) 昭和二十二年二月の教授會議事録より学制改革案

教授會を開らくこと

昭和二十二年二月十日(月)午後七時

場所 一〇四室

議事豫定

一、事務機構改革案

二、學制改革案

三、學校外にて師事する件

四、休暇を臨時措置として變更する件

夏休を短縮(七、二〇—八、三二)

冬休を延長(一一、二五—一、三二)

五、追試験成績の審議

六、ヴィオラ入學志望者の取扱ひについて——(本年度はヴァイオ
リンとして取扱ひヴィオラを参考とする。入學後はヴィオラを
専修とする)

東京音樂高等學校(假稱)

一、修業年限は四ヶ年とする。

一、本校に入學することを得る者は、中學校卒業者又は文部大臣の
定めたところによつて、之と同等以上の學力があると認められ
た者につき、試験の上學校長が之を定める。

一、本校で教授する學科目及毎週の授業時數は左の通りとする。

音樂、國語、社會科(一ヶ年) 人文地理(二年、三年) 東洋史

(二年、三年) 西洋史(二年、三年) 數學、物理學、化學、生

物學、地理學、體操、外國語(英、獨、佛、伊、露、支)

音樂は聲樂、器樂(ピアノ、オルガン、ヴァイオリン、ヴィオ

ラ、セロ、コントラバス、フルイット、オーボエ、クラリネッ

ト、ファゴット、ホルン、トランペット、トロンボーン、打樂

器、ハープ、其の他管絃樂及吹奏樂に使用する樂器）作曲の中

より、一科目を専修せしめる。その他に、ピアノ（ピアノを専修する者を除く）音樂理論（作曲を専修する者を除く）合唱、合奏、ソルフェージュを課す。

授業時數は音樂以外の學科目に毎週二十二時間を音樂に毎週八時間をあてる。

一、入學を許可すべき者の音樂の専修科目志望を次の如くする。

甲類——入學試験の場合、既に専修學科目を選択し、當該學科目の詮衡を受けるもの。

乙類——入學試験に専修學科目を選択することなく唱歌、ピアノにより音樂の素質の詮衡を受け入學後一ヶ年の後に専修學科目を選択する者。

甲類入學者は、入學後直ちに、専修學科目の學修を始めるが、乙類入學者は、唱歌、ピアノにより基本的なる音樂の教育を受け、一ヶ年後専修學科目を選択し、第二科目より専修學科目の學修に入る。

一、ヴァイオラ専修の件

從來ヴァイオラを希望するもの少く、又あつてもヴァイオリンとして入學させた。將來はヴァイオラと云ふことも考へる必要がある。

本年度はヴァイオリンとして取扱ひヴァイオラの試験を考慮する。入學後はヴァイオラを専攻させる。

東京音樂大學

一、本大學に左の學部をおき、各學部に左の學科をおく。

聲樂部 聲樂科、歌劇科

器樂部 ピアノ科、オルガン科、ヴァイオリン科、ヴィオラ

科、セロ科、コントラバス科、フリュート科、オーボエ科、

クラリネット科、ファゴット科、ホルン科、トランペット

科、トロンボーン科、打樂器科、ハープ科、其の他管絃樂及

吹奏樂に使用する樂器を一科とする。

作曲部 作曲科

指揮部 指揮科

邦樂部 能樂科、箏曲科、長唄科

樂理部 音樂美學科、音樂史、音樂學科、音響學科、音聲學

科

學生は一の學科につき許可せらるゝものとする。

各學科の授業科目を必修科目・選擇科目の二種とする。

學生は、その所屬以外の學科をも學修することを得

一、學生は毎學年の始めに於て當該學年に學修を希望する専修學科目以外の學科目を定めて、之を申請し、許可を受くるものとする。

授業の開始期が學年の始めでないときはその時に前項の申請をなすことが出来る。

一、三學年以上在學し、所屬學科の専修及び必修科目全部及左の標準による選擇科目について合格の成績を得たものを卒業者とす

聲樂部 專修科目 必修科目 選擇科目

器樂部	〃	〃	} 單位省略
作曲部	〃	〃	
指揮部	〃	〃	
邦樂部	〃	〃	

一、學生は同一學部に六ヶ年以上在學する事が出来ない。

一、再入學、轉科を希望する者については、教授會にて審議し、場合によつては試験を行ふ。

一、卒業後教員無試験檢定を受けたいものは、別表第 〃の學科目を併せて修了することを必要とする。

一、各學部の授業科目

專修科目

聲樂部	— 聲樂
器樂部	— 各自專攻の樂器の器樂
作曲部	— 作曲
指揮部	— 指揮
邦樂部	— 各自專攻の邦樂

必修科目

ピアノ	四年	週一
重唱	二〃	〃 出席卜成績
合唱	二〃	〃
和聲學	一〃	〃 二
指揮科		〃 二

必修科目

ピアノ	四年	週一
絃樂	二〃	〃
管樂又ハ打樂器	二〃	〃
合唱	一〃	〃
合奏	一〃	〃
和聲學	一〃	〃
對位法	一〃	週二
樂式論	一〃	〃
管絃樂法	一〃	〃
總譜奏法	一〃	週一

選擇科目

哲學概論	一年	週一
心理學	一〃	〃
音響學	一〃	〃
音樂史(西洋)	二〃	〃
〃(東洋)	一〃	〃
外國語	三〃	〃 二
(英、獨、佛、伊、露)		
藝術學	二〃	〃
美學	一〃	〃
邦樂科		
對位法	一年	週二
樂式論	一〃	〃 二

選擇科目

哲學概論	一年	週一	
心理學	一〃	〃	
國語學	一〃	〃	
音聲學	一〃	〃	
音樂史(西洋)	二〃	〃	
全(東洋)	一〃	〃	
外國語	三〃	週二	
(英、獨、佛、伊、露)			
藝術學	二〃	〃	
音韻學	一〃	〃	
美學	一〃	〃	

器樂部

必修科目			
ピアノ(ピアノ専修科ハ除ク)	四年	週一	
合奏	二年	週二	出席卜成績
オーケストラ	四〃	〃	同右
和聲樂	一〃	〃	
對位法	一〃	〃	
樂式論	一〃	〃	
管絃樂法	一〃	〃	
選擇科目			
哲學概論	一年	週一	
心理學	一〃	〃	

作曲科

音響學	一年	週一	
音樂史(西洋)	二〃	〃	
音樂史(東洋)	一〃	〃	
外國語	三〃	〃	
(英、獨、佛、伊、露)			
藝術學	二〃	〃	
美學	一〃	〃	
必修科目			
ピアノ	四年	週一	
樂器學	一〃	〃	
管絃樂法	一〃	〃	
選擇科目			
オーケストラに使用する樂器	一年	週一	
合唱	一〃	週二	出席卜成績
合奏	一〃	〃	〃
オーケストラ	一〃	〃	〃
哲學概論	一〃	〃	
心理學	一〃	〃	
音韻學	一〃	〃	
音響學	一〃	〃	
音樂史(西洋)	二〃	〃	
音樂史(東洋)	一〃	〃	
外國語	三〃	〃	

(英、獨、佛、伊、露)			
藝術學	二年	週二	
美學	一〃	一〃	
總譜奏法	一〃	一〃	

必修科目 (未決定)

選擇科目			
哲學概論	一年	週一	
心理學	一〃	一〃	
音聲學	一〃	一〃	
音響學	一〃	一〃	
音樂史 (東洋)	二〃	一〃	
〃 (西洋)	一〃	一〃	
外國語	三〃	二〃	
(英、獨、佛)			
藝術學	二〃	一〃	
美學	一〃	一〃	
國語學	二〃	一〃	
音韻學	一〃	一〃	

一、樂理部

必修科目 選擇科目の記載省略する。

卒業後、教員無試験検定を受けようと希望する者は左の授業科目を修了することが必要である。

教育學	一年	週二
教授法	一〃	一〃
教法實習	一〃	一學期 (三ヶ月)

入 學

- 一、學生を入學せしめる時期は、學年の始め授業開始以前とする。
- 一、入學を許可すべき者は、左の通りである。
- イ、高等學校卒業者
- ロ、文部大臣に於て前項と同等の學力があると認められたもの
- 前項のものは、左の試験に合格することが必要である。
- 一、大學にて專修を希望する學科目並に音樂の一般素質についてその他學力検査
- イ、東京音樂高等學校 (假稱) を卒業した者で、同校の專修音樂と大學で學修を希望する學科とが同一のときは卒業成績によつて銓衡を行ふ。
- ロ、東京音樂高等學校を卒業した者で、同校の專修音樂と大學で學修を希望する學科とが異るときは當該學科目について銓衡試験を行ふ。

(昭和二十一年度 議事録 教務課)

教授會開催の件

卒業・進級試験に關する打合せの爲め左記の通り教授會開催を豫定いたします。

記

一、二月二十四日(月) 一三〇〇

一、一〇四教室

一、試験に關して、その他

一、研究科・聴講生の詮衡について

(七) 第五十八回卒業式(昭和二十二年三月)

第五十八回卒業證書授與式

昭和二十二年三月二十九日午前十時

卒業式に於ける學校長の告辭概要

本日御卒業の諸君は、就學中戰爭の爲、思ふ様な勉強も出来なかつたにも拘らず最後迄止つて勉學を重ね、此所に晴れて御卒業なされた事に對して心から御歡びを申上げる。此の時に當つて一言御注意を申上げて諸君に對する餞けとする。

今日程音樂熱の旺勢やうせいな時はない。と同時に音樂家にとつては今日程危険な時は無いと思ふ。それは今日の様な、全國的に音樂熱の旺勢やうせいな時には、一寸した事でも有名になり、高額の收入を得る事も出来るのでともすると大事な勉強を怠つて、名聲を高める事や、収入の多い方に流れやうとする事に傾き易いものである。こう云ふ時にこそ、人を相手にせず、天を相手にしてじつと勉強をする心が一番大切である。

能樂の方の創始者である世阿彌の言詞に「命には果あるも、能には果あるべからず」云ふのがあるが、これは西洋の諺の「生命は短く、藝術は長し」と同じ意味であり、共に藝術にたづさわる者の心構へを云つたものである。つまり藝術には之で良いと云ふ限度がな

い。一生勉強を續けて行かなければならないと云ふ事である。その爲には、高い所に目標を置かねばならぬ。自分の感ずる所では藝術家はどうも人との對象と云ふ事に心を置き過ぎる様に思ふ。又地方の學校の教職員となる人の心構へとしては、現在日本の青年子女に對して當へる、音樂の教育と云ふ事に關しては非常に重大な意義があるので大いに努力、勉勵して貰ひ度い、之からの日本の再建には之等情操教育が如何に重大であるかと云ふ事を第一に考へなくてはならない。

最後に、現在の地方に行はれてゐる一般的音樂の傾向も非常に危険性が多く、且つ之に従事してゐる人間の種類にも非常に低級な者が多いので、其の中に這入つて行つて戦つて行く事は竝々ならぬ事である。

諸君は此の點にも大いに確かりとやつて戴き度いと思ふ。之を以つて諸君への、御祝の言詞とし、餞けとする。以上

(手書き) (昭和二十二年度 第五十八回卒業式並卒業生一件書類)

(八) 戦後の住宅事情による校内居住の資料

戦後の住宅事情により、校内に居住する教職員もいた。

音會一九一號 發送9月30日

昭和二十二年八月十三日起案

伺

左記の通り官舎料金を徴收して差支ありませんか。